

令和6年度 第二回文学館協議会会議録

開催日時： 令和7年2月27日(木) 13:30～15:30

場 所： 山梨県立文学館研修室

出席者： 委員：廣瀬孝嘉、秋山一江、飯島清樹、大塚 茂、田口綾乃、出澤忠利、
仲田道弘、成富耕志、西田 遙、長谷川千秋、山本久美子、横森一哲
事務局：(文学館) 三枝館長、和光副館長、天野次長、高室学芸幹、
保坂学芸課長、込山資料情報課長、北村総務担当リーダー、
中野学芸担当リーダー、野呂瀬教育普及担当リーダー、
小林資料情報課リーダー
(指定管理者) SPS やまなし 支配人、マネージャー
県観光文化・スポーツ部文化振興・文化財課：渡井総括課長補佐、田中主任

次 第

- ・開 会
- ・会長あいさつ
- ・館長あいさつ
- ・議事 1) 審議事項 令和7年度事業予定について
2) 報告事項 令和6年度事業報告等について
3) その他
- ・閉 会

会議録

○事務局から審議事項について説明

会 長 　　ただ今の事務局の説明について、ご意見ご質問等をお伺いしたいと思いますが、まずは審議事項の令和7年度事業予定に関してご意見ご質問等がありますでしょうか。

委 員 　　令和7年度の企画展・特設展についてお伺いします。
それぞれ各テーマで考えられていていいなと思ったんですけども、それぞれの目的の部分と、あと観覧の目標数が記されていると、令和6年度には書いてありますけれども、実際どうだったのか振り返りができると思いました。
目的の部分に関しては、例えば今まで文学館に来たことのない方に来てもらうのが目的だとしたら、そのための企画として、だからこういう

企画を考えたんだといった部分があると、整合性が取れるというか、わかりやすいと、だからこの企画にしたんだなというところで、理解が進むかなと思いましたが、目的等があるものについては教えていただきたいと思います。

会 長 目的、それから観覧者数の期待値といいますか、そういうふうなものでしょうか。

事務局 一つ目の特設展 辻邦生展の目的についてご説明させていただきます。

辻邦生という作家は、今現在ですと広く読まれているということではないのですが、1970年代前後に活躍をしまして、作品等をたくさん遺しています。中でも「銀杏散りやまず」という作品は辻邦生にとって大きな転機を得た作品です。父の故郷である笛吹市を訪れ、自身のルーツについて書かれた作品で、非常に山梨とゆかりが深い作家ということでこの作品を取り上げています。

今回、生誕100年ということで、辻邦生資料をまとまって収蔵している学習院大学史料館の協力を得て企画したものです。当館だけではなく、愛知県の美術館ですとか関係市町村の博物館施設等でも、辻邦生の生誕100年の企画が、大小様々行われる予定になっています。今回この山梨で行う辻邦生展は、その一番最初に行われる展示になります。ですので、辻邦生の生誕100年という記念の年をきっかけにして、この作家を未来に継承すると共に、山梨とのゆかりをより多くの方に知っていただくということで、今回の展覧会を行うことにいたしました。

事務局 続いて特設展「作家の絵ごころ」の開催の目的をお伝えしたいと思います。

これまでの文学館の展覧会といいますと、やはり原稿ですとか、文学者の手紙ですとか、文字資料、活字資料が非常に多く、また、それに付随する説明のキャプションも文字で書いていますので、作品を観る、説明を読むということに、非常に時間がかかり、なかなか理解するのが難しいというご意見をいただきました。

そこでやはり視覚的な資料を、展示に使えたらということで、美術作品ですとか、作家と文学者のコラボレーション、協同製作といいますか、絵と文字が一緒になった合作、そういったものの展示資料中の割合が多くなるようにしたいということで、「作家の絵ごころ」というタイト

ルで美術とのコラボレーションのテーマを設けました。

また、小説などの文学作品といいますと児童生徒にはちょっと敷居が高いと思われがちですので、夏休みに開催いたしまして、パッと見て絵でわかるというような子どもたちにも足を向けてもらいやすいような形として、絵の作品を選び、そこで多くの方に見ていただくことを目的に開催を予定いたしました。

事務局

「里見八犬伝」につきましては、どうしても文学展という、文学作品を日頃読む方、あるいはその作家に関心がある方は足が向くけれども、関心がそれほどなかった、あるいはまったくなかったという人においていただくところがいつも苦心するところでもあります。ましてや古典文学という、本当にその専門の人でないと関係がないのではないか、というふうにさえ思われるところがあるかなと感じていましたが、八犬伝は、私の子ども時代には、NHKの人形劇で非常に親しんだ記憶がありますし、またもう少し下の世代の方にも映画、確か昨年も馬琴を主人公にした映画がありましたけれども、非常にビジュアル的な場面で目にする、知っている。話は全部通して読んだということではなくても、いろいろな形で何かしら目にしてる、そういう作品だと思います。

文学が活字という世界だけではなくて、演劇とか絵画とか、現代ではゲームとかコミックとか、いろいろなメディアとの密接な関連を持って広がりを見せている、そういうところが魅力だ、そういう魅力があるんだよというところを、この八犬伝ではお伝えできるかなとも思っています。

江戸の文化への関心も最近では広がっていくと思いますので、そういうところを上手く糸口に企画にして、多くの方においていただける展覧会を目指したいと思っています。

目標総観覧者数につきましては、ご指摘のとおりと思いますが、ここで数字を用意したものがありませんが、目標数はもちろん開催前にいろいろ検討をして、目指したい数値を掲げて取り組んでおりますので、また改めてお伝えできればと思います。

会 長

説明をいただきましたが、何かあらためてご質問はないですか。

委 員

説明ありがとうございます。目的はよくわかりました。

その目的を達成するために、特設展・企画展の魅力がより伝わればいいなと思います。各展覧会でポスターのデザインをされて、それを掲示

したり配布したりすると思うんですけど、ここも集客においては、その魅力が伝わるかどうか確定するところかなと思うので、これは前回も言ったかもしれないですけど、ポスターについてはちょっとインパクトが足りないかなと、個人的には思っています。パッと目を引くとか、「行ってみたい、なんだろう」と思うようなデザインをしてくれるちょっと特徴的なデザインをすることで頼んでみるとかして、一度検証してみてもいいんじゃないかなと思いました。

会 長 その他関連でご質問等ございますか。

委 員 今、委員がおっしゃった目標の観覧者数というのはとても大事でして、是非これはあらかじめ出していただければと思います。

今までの一覧表を見ているんですけども、観覧者数が3000人しかなかったり、いろんなことがあるんですが、最低1日100人はお越しいただかないと、なかなか展覧会やっているんだというところがないと思いますので、その辺はぜひお願いをしたいと思います。

私は観光の立場からずっといろいろなお話をさせていただいて、前回もお話させていただいたんですが、県立美術館の方でも、同じ協議会の委員を務めているんですが、県立美術館では、今年はようやく冬の展示の方が、夏より多かったです。「超絶技巧展」です。UTYと共催の影響があるということなんですけれども、山梨の文化観光施設の一つとして、ぜひ冬の方に力を入れていただきたい。

この「南総里見八犬伝」をもうちょっとずらしてですね、冬を中心にやっていただけないかというのが要望です。江戸の文学というのは、今、NHKがやっている、「べらぼう」からだんだん関心が高まって行くと思いますので、秋から12月に掛けてピークになって行くかと思うんですが、それを踏まえて滝沢馬琴だとか、十返舎一九だとか、その辺のところを取りまとめて、最後のところで纏めていただければ集客に繋がるんじゃないかと。

滝沢馬琴の江戸の家ではぶどうがなっていたんですね。十返舎一九はワイン造りの本を書いた。そういう風なことも、ちょっとしたネタとして、集客につなげるようなことを是非NHKと一緒に、考えていただいて先ほどおっしゃっていた文学のコアのお客様とその周りのお客様を上手く取り込むような形で、やっていただければなということをおもいました。

会 長 はい、ありがとうございます。他にございますでしょうか。

委 員 小学校の校長なので子ども目線になってしまって申し訳ないんですけども、いろいろ先ほどありましたように、子どもはなかなか作家にまで関心が向かないということと、特に小学生は文学にはなかなか興味がないというところで、考えてくださっていてありがたいなと思います。

 今回も今、「児童文学の翻訳者たち」ということで、閲覧室で資料紹介してくださっていますけれども、資料紹介ということなので、たくさん児童文学が揃っているし、手にも取れるし、それからキャプションを裏返せば裏に説明もあるので、とても素晴らしいなと思うんです。ただ、小学生レベルでいうと、きっと本が並んでいるなというだけなんですよね。

 例えば、児童文学の翻訳者が翻訳を始めた。この翻訳者たちは、なぜ翻訳を始めたんだろう、というようなことがわかったりですとか、どんな苦労があったのかなとか、それから、もしかしたら始めの頃の翻訳はこんなふうに発表されたけど、実はそれは間違いで後に修正されたということがあったりとか、そんなことがあると子どももすごく興味が湧くんじゃないかと思うんです。

 来年度企画されている「作家の絵ごころ」という特設展も、視覚的なところを考えてくださって、子どもはまさに視覚的に捉えていくので、すごくありがたいなと思っているところですけども、先ほどご説明があったように文学と美術の交流というところで、深い親交、そういう交流をどう伝えるのか。子どもたちに、本が並んでいるというだけだとそこは力がない。どういうふうに作家と絵を描いた人の親交や交流を伝えるのか。

 動物と文学なんてとても面白いテーマですけども、行ったら本が並んでるだけではなく、例えば作者が動物をどう捉えているのかとか、見たらわかるようにすると、「あぁ、文学は面白いな」というふうになるんじゃないかと思います。

 閲覧室の“資料紹介”とあるので、そんなことまで望めないかもしれないんですけども、チラシや何かを見て面白そうと思って文学館に来た人たちが、より興味を持つような工夫するにはどんなふうになればいいのかなと考えて工夫することで、今回の「児童文学の翻訳者たち」、聞いただけで何か面白そうだなと思って来たときに、実際見るものが、予想とマッチしてくるのかなというところを期待するところです。

会 長 子どもたちが食いついていくような、何かこう仕掛けがあるかということ
ことです。いかがでしょうか。こんなことを考えていますというような
ことがありますか。

事務局 「作家の絵ごころ」というところに触れてくださったんですけれど
も、まさに今おっしゃってくださったような、作家と美術がどう関わっ
て、それぞれどういうふうに影響し合ってどんなふうになったかという
こと。

例えば芥川龍之介などを例にあげますと、芥川龍之介はやはり美術に
非常に興味を持っていて、高い見識があって、そして自分の著書の作
り、装丁に非常に拘りを持っていました。ですから、芥川自身がこんな
本にしたい、こんな表紙にしたいということを、友人で非常に仲がよか
った画家である小穴隆一と二人でセッションしまして、お互いの希望、
あるいはここは譲れないというようなやり取りがありました。芥川の著
書を1冊展示するだけでは、そこまでのストーリーというのはわからない
のですが、それに向けた芥川の手紙ですとか、あるいは校正の試し刷
りなども当館で所蔵しておりますので、この本ができるまでには、こん
なに二人で苦労して作ったんだよという、そういった形でのやり取りを
丁寧に紹介させていただければと。今お話を伺いながら展示のヒントを
いただきました。

一つ一つやはり、ただ物を置くだけではなくて、そこに至るまでの過
程、それからなぜこの本を、この資料を出したかという、こちらの意図
を丁寧に説明していけたらと思っております。ご教示ありがとうございます
ました。

会 長 ありがとうございます。その他何かございますか。

委 員 令和7年度の企画が非常に面白いものが多くて、これは目を引くな
というふうに感じました。「辻邦生」であったり、それから「南総里見八
犬伝」、ややマニアックではあるのですが、響く人には本当に響
く展示で、これまで我々がこの協議会を通じて、いろいろな意見を言っ
てきた、それが踏まえられた企画が今回4つ並んでいるというふうに感
じているところであります。

その際に、どんな人に来てもらいたいかということを考えます。どん
な人に来てもらいたいのか、今まで文学が好きな方にやはり来てもらい
たいのか、それとも、これまで文学には馴染みがなかったんだけど

も、ちょうど山梨に旅行に来て、ちょっと行ってみようかなと、ふらっと来たら意外と面白かったといった方もターゲットにしていくのか、それによって見せ方であったり、広告の仕方も変わってくるのかと思います。

少し先の未来になってしまうのかもしれませんが、60歳以上の方が非常に多いというようなことも一つのヒントになってくるであろうと。この人たちがどうすれば来てくれるのかということであったり、意外と面白いと思ったのが、来場のきっかけがインスタとかSNSが普通は上位に上がるところが、こちらでは知人の紹介、口コミ、家族が行きたいと言ったり、ホームページを見られたり、チラシ・ポスターというような、割と年齢層と合っている形であるというふうに感じております。この方々がさらに行ってみたいと思うようにするには、どうすればいいか、来館者のご意見を分析していただけるとが隠れているように感じております。

会 長

来館者にどう合わせるか、対象をどう絞っていくか、広げていくか、あるいはそういうせめぎ合いの中で工夫を凝らして調整をしながら、毎回の展示に臨んでいるんだらうというふうに思っています。ご苦労をいただきながら、それでもなおかつ観覧者を、数多く集めたいというふうなことだらうと思います。どういう仕掛けをしていくのかというところが、大事なのかと思いました。

何かご意見がございましたか。

事務局

先ほど委員の方から、冬の集客というご指摘がありまして、その一つとして、この秋の八犬伝の展示会の会期をもう少し冬まで延ばしてはという、ご意見をいただきました。

文学館の場合、企画展というのが年1回でありますので、メインの催しになります。その集客というところを考えなくていけないところで、多くの場合は秋の観光シーズンを当てているのが企画展の開催期間になります。

また、出品交渉がある中では、なかなか2ヶ月を超えての資料展示ということをお蔵者をお願いするのが、厳しいというところが一つございます。会期中の展示替えという方法がありますが、今回この八犬伝については、会期もやや長めの計画になっていて、所蔵者の話もいろいろとうかがう中で、この会期を設定させていただきました。これをさらに、大河ドラマの最終回に繋げていってというところは、ちょっと今回難し

いかなと思っています。

ですが、その冬の集客も今後の課題として受けとめて、文学館の来館者の方に冬にも心を留めていただけるように考えて行きたいと思えます。馬琴のぶどうの栽培とか、十返舎一九のワインの話などもまた詳しくお聞かせいただいて取り上げることを考えたいと思えます。ありがとうございました。

会 長

配付資料を見ながらですね、工夫を凝らして、年間を通しての連続性を大切にしながら様々な企画運営に努めて、かなり挑戦しているのではないかと思っています。

そういう中で子どもや家族を巻き込んだ、令和5年度の企画展「ふしぎ駄菓子屋 銭天堂へようこそ」もその挑戦の結果だと思っています。とにかく、話題性のある作品を取り上げるのも面白いだろうし、ちょうどNHKで江戸時代のことをやったということに合わせてもそうですし、時には分かりやすい子どもも喜びそうな企画を取り入れて、子どもと大人と一緒に親子で楽しめるような内容のものがあったら面白いのではないかということで、秋の企画展が組まれたと思いますし、そういう意味でとても楽しみであり、どんな企画展になるんだろうと私も思っています。

また、何気ない日常の大切さとか、あるいは平和の尊さを訴えかけるような展示があっても面白いのではないかというご意見が前回あったかと思いますが、今回は戦後80年、昭和100年、それを題材にした常設展、それから資料紹介があります。そういうものも楽しみだと、どんなふうにそ見に来ていただく人たちに訴えることができるのだろうかとか、特に資料紹介というところが、どんなふうに紹介をするんだろうかなと思っていますので、ご説明いただけますでしょうか。

事務局

閲覧室の資料紹介は、観覧者の皆様に文学館の資料に触れていただき、実際に読んでいただくということで、閲覧室内で展示を見ていただくところがございます。それぞれ来年度もテーマを設けて紹介していく中で、手に取って見ていただけるような何か工夫ができればいいなと思うので、キャプションを添えたり、デザイン性の高い展示説明や、お客様の目に留まるような工夫などを行っているところがございますが、またそれぞれのテーマの中で考えていって皆様に見ていただけるようになればと思っております。

⑤

会 長 そうですね、どういうふうに導いてくるか、どういうふうに中身を見たらいいのか、ちょっとアドバイスみたいなもの、解説みたいなものがあるとよいと思いますが、どうでしょうか。

事務局 そうですね。その資料がどういったものであるか、どのような人が書いているか、そういった資料の魅力を伝えて行けるような工夫を考えていきたいと思っています。

会 長 ありがとうございます。他にどうでしょうか。

委 員 今回の資料を拝見しまして大変分かりやすい資料だと感じます。
先ほどからの話の中で、審議事項の中の今後の希望と書いていいんでしょうかね、それを含めてお話をしたいと思っています。
昨年と比べて今年の来客数が落ちているということがあるんですけども、確かに来客人数というのは一つの指針にはなると感じております。ただし世の中が量から質に変わっているんで、どういうふうに見せるか。展示を見に来た方がそれをどういうふうに取り扱っているかということ、できるだけ考えてほしいなと感じております。
あと私としては作家がどんなものを食べたか、どんなものが一番好みで食べたか、どういうところに食べ歩いてきたかとか、そういうところをぜひ教えていただきたいと思っています。作家の人たちはどういう思いで、どんなものを食べたのかということを感じて、そんなことからまたもう一度本を読んで、文章を読んでみたいというふうに思いますので、できましたらこれから作家の方が、どういうことが特に好きだったか、久保田万太郎さんじゃないですが何にあたって亡くなってしまったとか、それは大変好きだったからそれを食したんじゃないかと思っておりますので、できるだけ親和性があると言いますか、こういうものを食べていたんだということが分かるものを紹介していただくと嬉しいというふうに感じます。

会 長 ありがとうございます。これについて何かございますか。

事務局 来館者の方にどれだけのものを持ち帰っていただけるかということ、できるだけこちらで工夫して、先ほどの閲覧室の紹介の仕方ということもそうだと思います。提供の仕方でしょうか。委員が今おっしゃっていただいた、例えば作家がどんなものを食べたかというようなエピソード

ード的なこと、昨年の夏の「文学はおいしい」の展示のところで、若干でしたけれども、例えば山本周五郎が、山梨の甲州の葡萄酒を知って非常に気に入ったと、今「周五郎のヴァン」という名前のワインがあったかと思います。それを自ら随筆に書かれていたところを紹介して触れたりしました。そういう見る方が、ちょっと「お!!」と思うような、そういうところをもっと上手く、職員も気をつけて見い出して、それに興味を持っていただけるようお伝えしていくところを工夫していきたいと思いました。

委員

いろいろご説明いただきまして、文学館のスタッフの方々、また指定管理者の方々、すごくいろいろ工夫をして集客に繋げようとしていらっしゃる、また内容を充実させようとしていらっしゃる、ことがよく分かりました。

先ほどご説明の中にもありましたけれども、今年度、美術館とのコラボをなさったということ、それからテレビ山梨とのコラボで、たくさんの方たちが来てくださったというお話がありました。今後も、美術館と同じ敷地にあり、芸術の森公園があるというメリットをぜひ活かして、今後とも美術館との連携を図っていただけたらなと思いますし、マスコミもやはり、なんといっても一番訴えかけるものが、宣伝効果があると思いますので、今後もぜひ活用していただければと思います。

それから2025年が昭和100年にあたり、戦後80年にあたるということで、常設展の中とか、資料紹介の中にはそれらの企画が盛り込まれているということでした。その資料紹介の戦後80年、戦争と文学という期日が8月27日から9月10日となっていて、いろいろな関連があつて無理なのかもわからないんですけども、子どもたちにもぜひこの企画に触れてもらいたいと思うので、夏休み中に始めることはできないのかなということをおもいました。

それと映画会、どんな映画が予定されているかわからないんですけども、やはり今年戦後80年ということで、戦争を扱って映画化されたものがたくさんあります。例えば、一般的なものであれば、壺井栄の「二十四の瞳」とか、野坂昭如の「ほたるの墓」とか、井伏鱒二の「黒い雨」とか、井上ひさしの「父と暮らせば」、中沢啓治の「はだしのゲン」、それから「収容所(ラーゲリー)から来た遺書」を元に作られた、二宮和也さん主演の、そういったものを、是非これから計画をするのであれば、そうした戦争に関連した映画などもやっていただけると、とてもいいのではないかなと思います。

それから私個人の好みなんですけれども、これは映画会の話ではなく、太宰治の「お伽草紙」という話がすごく好きなんですけれども、一節によると、防空壕の中で自分の子どもに語るために作られたなんていうお話を、そういうふうなものも資料紹介の中に入れていただけたらいいかなと思いました。

会 長 具体的なお意見ありがとうございます。映画は、見てすぐわかるというところもありますが、文学の資料に合わせて、お考えいただければということだと思います。

事務局 貴重なご意見ありがとうございます。
まず映画ですけれども、年間の計画を今立てているところで、おっしゃってくださったような戦後 80 年ということで、子どもたちにも見てもらえるような、やはり戦争に関連した映画を入れられるように、進めていきたいと思っております。年間のラインナップを計画しているところですので、はっきりと申し上げられませんが、やはり戦争に関連した映画を入れたいと思って進めております。

また展示につきましては、常設展の一部の展示替えになりますけれども、特にテーマを設けまして、「文学者と疎開」ということで甲府に疎開した井伏鱒二と太宰治、二人とも昭和 20 年の 7 月 6 日の夜中にあった甲府空襲、たなばた空襲も経験しておりますし、その後またそれぞれの郷里であります広島と青森の方へ再疎開するといった流れがあります。

また先ほど委員がおっしゃられたような、防空壕の中で娘に語って聞かせるというところから始まる「お伽草紙」ですけれども、そのあたりの小説、また甲府空襲を描いた太宰の「薄明」など、いろいろ関連した作品が多々ありますので、館の所蔵資料ではありますが、そういうものを出しながら紹介したいと思っております。

会 長 他にございますでしょうか。

委 員 教育普及のところでちょっとご意見、話をさせていただきたいと思えます。

高等学校の文化祭で共催して、例えば創作教室とかというふうな形でいろいろ企画されており、今年もしていただきましたけれども、例えば創作したのであれば、次に発表の機会みたいなものも文学館で作っていた

だけると有難いなというのがあります。例えば、高文連のいろいろな大会があって、私は文学専門部の方に関わっておりますけれども、小説だったり詩であったり短歌だったり、そういう文学賞、高文連賞の発表の場でこういうところを使わせていただくと、より親和性が高くなると思います。11月の前後が高文連でいろいろな活動をする時期なんですけれども、ちょうど企画展の時期とも重なりますし、そういったことでこういうところを使わせていただきますと、例えば高校生の集客を少し見込めたりですとか、朗読の教室もやっているようですので、放送部とか朗読のそんな形の企画と一緒に、高文連の企画ができればということです。

なかなか高文連の方も発表する機会とか、皆さんにお見せする機会がないので、文学館と一緒に、発表する機会とか、あるいは見てもらうような機会を企画として一緒にできたらというふうに思います。ちょうど企画展の里見八犬伝で、江戸文化というところにも関わってくると思いますので、今後、そんな中で高校生が参加できたり、あるいは発表できたりというような企画があるとよいと思います。ぜひお考えいただければと思います。よろしくお願いします。

会 長

ありがとうございます。文学館の指定管理者のいろいろな工夫があります。それからいろいろな挑戦があります。それだけだとなかなか上手くいかない。ここにいる方々の所属するところが連携して上手くいくのではないかなと、いろんな意味で数字の輪が広がるんじゃないかなというふうなことをつくづく感じました。そのような機関の協力を得ながら、文学館の活動が更に充実したものになればいいと思っていますところ

委 員

今回2回目の参加になるんですけども、令和7年度の展示もすごくどれも面白そうで、特に里見八犬伝の展示は映画で個人的に興味を持ったもので、ちょうど今度図書館で借りて読んでみようと思っていたので、すごく興味が湧きました。

いろいろな方の意見を聴いて私もすごく感じたことがあったんですけども、まず来館する前の一ポスターなどの広報に関しては、私のような同世代の若い人たちはやっぱりインパクトのあるものに興味が湧くと思いましたが、今の来館者の方が60代が多いというような情報を私も知りまして、ポスターがもし若者寄りのデザインだったりしたときに、60代の方たちが興味を失う可能性もあるかと、そちらの方もちょ

っと気になって、若い新しい来館者を増やすためにデザインを今風にするのか、今のデザインでのアプローチで、若い人たちにどうアピールするのかというのは、やはり方向性によって変わってくるなと思いました。楽しいデザインの方がポスターのインパクトがあったり、デザイン的な視覚的なものよりも、作家の具体的なエピソードに興味を持って来館されるのであれば、テレビや新聞などの情報に、そういうことを取り入れて、効率的なアプローチが必要かと思いました。

個人的に某観光施設の受付の仕事をしておりまして、来館する方が結構高齢の方が多く、チラシをよく手に取られるなという印象があるので、具体的な情報が書いてあるのか、視覚的なものなのかというのも、その目的によって変えていくのも手なのかと思いました。

具体的にいきますと、「辻邦生展」の方では目的をお伺いしたときに、学習院大学、県外の施設の方と連携を取って、タッグを組んでやるということをお聞きしたので、そこが結構面白いなと思いました。山梨県内にゆかりがある作家というのは、山梨県立文学館だからこそできると思うんですけども、20代や学生からすると、都内とかの文学館、美術館よりも、ちょっとマイナーなテーマかなというふうに思ってしまうこともあると思って、山梨県だけに収まらず、県外の人たちともタッグを組んで、一緒に今回生誕100年をお祝いする展示をしてるんだよというところも、より明らかにすると興味が湧くと思いました。

「作家の絵ごころ」については、学生や子どもにも見せたいということですので、展示の内容の説明の部分に関して、量とか言葉遣いを、若い世代の人たちに寄せたシンプルなものにするのか、そういうところが少し気になりました。

「里見八犬伝」は、映画でも取り上げられましたし、今の大河ドラマ、江戸時代の題材が取り上げられていますので、どうしても今の時代との接点みたいなものと一緒にアピールすることが大事なのかなと思いついて、例えば大河ドラマの中に出て来るものは、江戸時代の方たちの生活が色濃く表れていると思うので、「里見八犬伝」の世界と、大河ドラマに出てくる江戸時代の人たちの生活と共通して出ているのかと思うので、そういうものと関連付けて一緒に展示で出せたら、ちょっと興味が湧くような展示になると思いました。

最後になりますが、閲覧室の内容や、展示もですけど、見た後にどういうふうな行動をするかということを考えたときに、文学館は読むものを扱うので、美術館だったらそこで実物を見てすごく感銘を受け結構満足感が得られると思うんですけども、文学館だったらそこで見てあら

ためて興味が湧くことが結構あると思うので、その後に初めて見た作家や、作品について何から読んでいけばいいのか、そういうところを、自分で判断することが難しいと思います。例えば、その展示で扱う作家の作品の中で、まず初めに読むのがこれとか、展示の内容に合わせて、「作家の絵ごころ」だったら、美術との関連というふうに決まってくると思うので、そこに関連してもっと掘り下げたい、知りたいのであればこの本がいいよというような、次に繋がるような、促すようなことも文学館でも図書館などと連携してできるなら、美術館との違いというか、文学館だからこそできるサポートのようなものがあるのかなと思いました。

会 長 文学館と図書館との連携というような話で、一番若い世代からのご意見でした。どうですか、何かございますか。

事務局 先ほどお話しがありましたポスターのデザインに関してなんですけれども、資料の 16 頁をご覧くださいと思います。

「文学はおいしい」という特設展の展覧会のポスターですけれども、こちら展覧会の資料としては、文学館で所蔵しているものを展示したんですけれども、ポスター・チラシについては、文学はおいしいということで、おいしい食べ物を連想させるような、ちょっと可愛らしいイラスト等を使って、広報を行いました。その結果ですけれども、「文学はおいしい」については、観覧者の年代層が 10 代、20 代、30 代、40 代と幅広い層の方がご来館いただいというところは、やはりデザインを検討することによって、このように幅広い層に支持をいただけることがあるのかと思っております。

また逆に「中村星湖」は、どちらかという今まで文学館のイメージどおりの中村星湖の写真があって資料展示をしておりますというようなポスターの展示デザインにしたところ、やはり 60 代以上がダントツで多くなりました。

ターゲットを絞った広報の展開、誰にどのように向けて発信するかということ、文学館の指定管理者、文学館学芸課が、協同してターゲットを絞ってデザイン等を考えて、幅広い層に来ていただけるようにと考えております。

事務局 補足というか追加でお話させていただきたいと思いますが、「文学はおいしい」につきましては、今年の協議会でいただいたご意見を参考に

させていただき、今までとはちょっと違ったデザインにチャレンジしてみた結果がこのような形になったということでございます。

「中村星湖」の話がありましたけれども、65歳以上が圧倒的にというところはですね、これは当館だけに限った話ではなくて、私どもが指定管理を行っております各都道府県の施設、どこも共通の課題です。高齢化と固定化というふうなところが本当に課題でありまして、そういったところも、今来ていただいているお客様に、しっかりとまた次も来ていただく、という広報が一つと、中長期的に館の発展というところを見たときにですね、やはり新しい世代、若い世代の方にも来ていただく、というところこの二つが、大きな広報のテーマとしてあるのかなというふうに考えながら日々活動を行っております。本当にこの二つというのは、なかなか一つで括るのが難しくて、広報をいろいろ工夫しながらその辺りはやってはおりますけれども、SNSなどターゲットに向けて発信しているんですけども展覧会の魅力、あと施設、文学館そのものの魅力をいかに伝えていくのかということころは、共通かなと思います。展覧会名がぼーんと頭に来るような広報がどうしても多くなってしまうんですけども、今後はそれより内容がもっと分かりやすく伝えるにはどうしたらいいのかということころを工夫しながら、トライ&エラーというところもありますけれども、取り組みながらやっております。今後も引き続きまた協議会その他の機会に、ぜひご指導いただければありがたいと思いますのでよろしく申し上げます。

委員

今、幅広くというところが出たんですけども、文学館に来るのに、いくつか引き付けるものがあります。小学生だと、まずは素材があって、「ふしぎ駄菓子屋 銭天堂へようこそ」ですが、それ自体が魅力的ということで、学校の方でもチラシを配ったところ、子どもたちが保護者に行きたい、連れてってということで、家族で行ったよという話を聞いています。

それからあとは、体験、ものづくりというところ、そこを組み合わせた企画もしていただいて、ありがたいと思っています。

あともう一つ、指定管理事業と関わっているところで、もしかしたら「(3) その他」に該当することかもうんですけども、私の目線は、子どもはなかなか文学に関心がないというところを、どうするかというところなんです。結局ここへ来るということは、目的があって来る、見たいとか、または美術館にしても、文学館にしても、やはりここまで来るということは、すごく興味があって来るということ、または家族が誰か興

味があるというところなんです。その目的がなくても、家族が行くようなところ、例えばですけれども、これもお金がかかるかもしれないのですが、ショッピングモールの広いところで、よく自動車の展示をやっています。あれは、お父さんがディーラーに自動車を見に行くぞって言うても、子どもは興味ないし奥さんもなかなか行けない。だけどショッピングセンターだったらみんなが行くから、そこにたまたま車があるとちょっと見ようかということになる。それと同じように、ある兄弟でもお兄ちゃんはちょっと文学に興味があるけど弟はぜんぜん興味がない。それでお父さんもお母さんも興味がないとなると、なかなか文学館に来ないんですよね。けどもショッピングモールだったらそういうことはない。そこに文学館のものがちょっとあって、そこに行ったら、なんか面白いね、こんなものがあるんだったら文学館に行ってみようかっていうふうな、目的があつて来るとは来ないけど、家族みんなで行くところに文学館の何かがあつて、そこで興味を持って、文学館に行こうっていうことになるとか、そんなこともあるのかなあと思って、ちょっと今ひらめきました。

委員

先ほど映画鑑賞会のお話があつたんですけれども、戦後 80 年の企画ぜひ期待したいところです。ちょうど「八犬伝」の企画展がありますので、「八犬伝」の映画を見られるのかわかりませんが。会期の始めの方に映画鑑賞会があると、作品をよく知らない方にも展示に足を運んでもらえるんじゃないかと思いました。

あと、より幅広い方々に文学館に興味を持ってもらうという意味で、武田神社の前に信玄ミュージアムがありますけれども、あそこでよく好きな武将ランキングとか、川中島の戦いで信玄と謙信どちらが勝ったんだとか、いろいろな戦略とか人物像とか紹介されていて、来館者が投票して、どっちが勝ったかを決める、という、ちょっと文学館とはターゲットも内容も違うと思うんですけれども、資料をただ見るだけでなく、参加型で自分で見て考えて投票する企画をされたらいかがでしょうか。方代の歌で今回投票企画をされたということなんですけれども、同じように例えば作品だったらこれが好きだとか、作家だったら誰とか、文体、筆跡はこの人が好きとか、そういったものがあれば、何かいろいろ興味を持って見られるのではないかと思います。

あと、先ほどもおっしゃっていましたが、人物を掘り下げる展示ももちろん大事なんですけれども、これまでやられている、テーマを食だったり、山梨だったら山とか、女性とか、あと時代とか、そういう人物で

できる展示がある一方で、文学者の関わりで見ると、山梨に関わらず幅広く交友をとらえるといった面では、より幅広く興味を持ってもらえるのかなと思いました。

委員

書店の立場から言わせていただくと3つありまして、一つは令和7年度の活動の中で、雑誌に見る昭和の文学というものがありましたが、書店として大変興味がございます。

雑誌というのは、本当にその時その時の世相を表すものだと思います。実は今、雑誌は非常に低迷しておりまして、「週刊朝日」が休刊したり、来年には「週刊ダイヤモンド」も休刊するというような話があるぐらいで、非常に雑誌が厳しくなっております。

そういう中で、昭和の時代というのは雑誌がものすごく売れた時代です。その時どういうものが売れたのか、非常に興味が湧いてくるわけです。文学とは関係ないかもしれない雑誌の面で行くと、例えば「少年ジャンプ」がギネスに載るぐらいになったとか、そういったものは今の若い人も、いったいどういう表紙だったのか見たいとか、逆に、岩波書展の「世界」はどんなものを特集していたんだろうとか、そういったことに非常に興味があるので、ぜひ上手に素材を使っていただいて、成功させてほしいと思っています。大変期待しております。

二つ目はですね、講堂の利用状況についてお伺いしたいのですが、先ほど報告がありましたように、昨年からは音楽活動を可能にしたという新しいチャレンジをされていますが、それによってどういうふうに講堂の使用が増えていったのか、資料に書いてありませんでしたので、知りたいところです。せっかく新しい試みをされたので、それについて結果も検証したほうがいいかと思いました。

あまり講堂を利用できることが知られていないのかと思いました。結構図書館はパンパンになるぐらい埋まってるんです。それを考えると、音楽活動を可能にしたというのは素晴らしい変化だと思いますし、もっと上手にこれを広げて、数字の検証をしていただきたいと思います。講堂を使うことによって、講堂目当てで来たお客さんがそのまま文学館に来てくれることは十分あり得ることだと思いますので、ぜひ活用していただきたいなと思います。

三つ目は、先ほどの他施設との連携という話で図書館との連携が必要じゃないかなという話が出ました。2024年の政府による「経済財政運営と改革の基本方針」いわゆる骨太の方針の中で、国力を正すためには大変重要であるとして、書店活性化が盛り込まれました。その中で、書店と図書館、いわゆる関係機関との連携協力の実現が期待されています。

やはり文学館も当然関係機関となるわけで、ぜひ、図書館、そして我々書店、それから行政との連携を深めてほしいと思っています。

事務局

先ほどお話しにありました講堂についてご説明させていただきたいと思います。コロナ前の令和元年度になりますけれども、この時の利用が、29,369名、件数で言いますと144件でした。今令和6年度は1月までの数字になりますが、20,471名、利用件数としては120件というところで、コロナ前に比べますと、1回あたりの利用者数は少し少なくなっている状況ではありますが、利用件数とすれば、少しずつ上向いているというような状況になっております。

ただ音楽での利用は、なかなか進んでいない現状であります。そのために私たち指定管理者としても、ここで音楽が使えるよということをPRするために、先ほど説明がありました、UTYさんとのコラボレーションの「スゴろくハッピークリスマス」というイベントを開催いたしました。ここで音楽イベントができるということをPRすることによって、利用促進と集客に努めていきたいと思っています。

また、いつも書店商業組合さんにはご協力をいただいて、書店で展覧会に即した広報などのご協力をいただいております。この場を借りまして、御礼申し上げたいと思います。ありがとうございます。

事務局

指定管理者からもう1点、先ほどショッピングモールというようなお話をいただきました。実は、この何年かショッピングモールでのアウトリーチの活動をさせていただいておりまして、イオンモール、イトーヨーカドー、甲斐市のラザウォークで、今までに数回行っております。もともとは2年ほど前、ちょうど今ぐらいの時期に長期休館となっていたので、その時に文学館のアピールをするということで、場所を借りてやらせていただきました。その後も、何度かやらせていただきました。

また、先ほど報告いたしましたが、図書館も使わせてもらいながら文学館をアピールする活動をやってきました。今、講堂の件もご意見いただいたんですけれども、確かに講堂の音楽利用の認知度、これからどんどん高めていかなければいけないところも我々の課題です。

文学館という専門的な施設ではあるんですけれども、学芸課の方で専門分野における認知度を高めていくのと対照的に、指定管理者としてはやはり、裾野を広げるといった活動を意識しながらいろいろなことを考えて、その中で家族で楽しめるイベントを私どもも意識しながら企画しているところです。

例えば、講堂の音楽利用、先ほど言ったスゴろくのイベントで初めて訪れたという方、イトーヨーカドーでアウトリーチを見て初めて文学館に来たというような一つ一つが、子どもたちにとって文学館に来るという原体験になると感じております。辻邦生展で小学校3年生の子どもが見に来たいかという、それはなかなか難しいと思いますので、それ以外のところでいかに文学館に足を運んでもらう機会を作るか、というのが永遠のテーマで、もう15年指定管理をやっておりますが、そこは必ず続けてやっているところではあります。原体験を作ることが、10年後、20年後の文学館に足を運んでいただく、彼ら彼女らが大人になった時に文学館に足を運んでいただく時のハードルを、少しでも下げようところに繋がればよいなと信じて、日々活動を続けておりますので、今後もよろしく申し上げます。

会 長

ありがとうございます。文学館の催し物も多方面に渡っておりますので、どこに狙いを持っていくのか、そこが難しいところだと思います。それぞれにメリハリを付けて、どこをターゲットすればいいかということ、見失わないようにしながらやっていかなければならないというふうに思います。

その他、何かございますか。ご意見もご質問の出尽くしたようですので、お話ししたいと思います。

審議事項の令和7年度事業予定について、このような方向性でよろしいでしょうか。

一同拍手

ありがとうございます。異議なしということで、令和7年度事業予定については承認されました。

それでは次に、報告事項の令和6年度事業報告等について、ご意見ご質問等ありますでしょうか。先ほどのご質問ご意見等の中でも同じようなことがあったかと思いますが、何か新しいことがありましたらどうぞ。

委 員

教育普及事業につきましては、校長会の方にもご説明に来ていただきました。ありがとうございます。それから、学校だと、図書室もあるということで、司書がおり、司書会の方で、いろいろな勉強会で学芸員の方に来ていただいて、それもありがたいということも聞いています。あ

るとき草野心平さんの資料を説明してもらい、それを子どもたちに還元できたという話もうちの司書から聞いています。

ここには表れていないんですけども、学校説明会、司書との勉強みたいなものも、翌年度の事業としてもしかしたらやっていただいているんじゃないかと思っています。ありがとうございます。

会 長

ありがとうございます。他に何かございますでしょうか。

ご意見もないようですので、報告事項を終わりたいと思います。

文学館及び指定管理者には今後とも、魅力ある展示とPRに努めるとともに、文学の楽しさや奥深さを体感できるような、幅広い活動をさらに工夫してほしいと思っています。

また委員の皆様には、今後とも文学館活動に深い関心をお寄せいただき、自分たちに何ができるのかという視点で、それぞれの分野で連携協力をしていきながら支援の輪をさらに大きくしていただければありがたいと思っています。

本日も貴重なご意見を賜り誠にありがとうございました。協議会を含めて、実質的な活動の更なる広がりを期待しながら議事を終了したいと思います。ご協力ありがとうございました。